

文学博士堀一郎君の「我が國民間信仰史の研究」に対する授賞審査要旨

本書は我が國の民間信仰史のなから、特に定任農耕民の信仰に顯著にあらわれる神々の遊幸、神人の遊行來訪の伝承と信仰、およびそれを表出する儀禮などに注目し、その変遷、習合、ならびに分化の跡をたずね、また類型を辿つて、民族信仰の原初的形態へ遡ろうと試みたものである。(二卷五部二十二編より成る。)

第一卷第一部「民間信仰の形成と仏教の初期民間伝播」は、全体の序編であり、民間信仰の形成に見られる種々の要素と、信仰受容の態度の特色を指摘するとともに、氏族制度的構造を持つ我が國の上代の社会に、新しく渡來した仏教が、いかに受容されたかという問題をも取扱ひ、仏教が一方では國家的宗教として成長しながら、他面で地方民間に伝播してゆく徑路をたどる。たとえば第四編では、奈良時代を通じて最も典型的な民間遊行の宗教者なる行基について、日本靈異記の伝説を分析し、当時の沙弥、優婆塞の遊行の有様を彷彿せしめ、固有の農耕文化的信仰を持つ我が國上代の民衆の間に、外来宗教たる仏教がいかに浸透して行つたかを考察する。

かくて第一部は、次の「伝承説話編」を通して「宗教史編」への序説的意図を持つ。

第二部の伝承説話編、「固有伝承及び信仰に現われたる遊幸形態」は、全体の考察の出発点となるものであり、第五編「天津神の遊幸と古代日本人の信仰生活」では、古事記その他を資料として、古代伝説に現われた神々の遊幸、即

ち降臨したり、他地域から来往転移する神格を、海外の周辺民族の神話伝説と比較しつつ考証し、その由来を研究している。そして、我が国の国津神に対する天津神の信仰も、土着神に対する遊幸神の信仰として解釈されることを論じ、第六編・第七編では、上代の古典および以後の民間伝承に現われた主要な遊幸神をはじめ、古代伝承に見られる東国経営の天津神や地方来往の英雄伝説等の土着、流布の経過を扱い、また祭祀儀礼の問題として、いわゆる遊幸神事の解釈をも試みている。第八編は常陸、播磨、出雲、豊後、肥前等の古風土記伝説における遊幸形態をとりあげ、地名伝説を考証して、神々の活動、天皇の巡幸、英雄の渡来などが、いずれも遊幸説話の類同形態であることを指摘している。また第八編に於ては、かかる信仰形態の中世的分化現象を、武將遊行の民間伝承にとつて、その信仰背景を見、ついで死霊、神霊の崇拜信仰とその統御にふれ、鎮遏呪術の発達との連関性を考えて、強大な遊行神は一面御霊統御神の性格を帯び、これが農民の信仰心理の上に、強く受容せられるとともに、特殊の神人団によつて、「語り物」として芸能化せられてゆく過程をも考証している。

以上のことからして、第二部では、遊幸神に関する信仰が、土地に定着する農民の間に明らかに存在することを確かめ、且つこの信仰が遊幸来往すると信ぜられた死者の霊に対する崇拜、並にこれに由来すると想像せられる世界の神霊や英雄に対する崇拜と相俟つて、第二巻にのべられる宗教的遊行者を迎える民間伝承の素地を作つたと見る。

次に第二巻の宗教史編に於ては、以上の遊幸神の伝説と表裏をなす呪術的宗教的な遊行者を中心とする民間信仰を研究する。すなわちまず、「ひじり」、俗聖について、その発生、分化の迹をたずね、遊行者、来訪者の類型を、念仏系、修験系、陰陽道俗神道系の三類に分ける。

第二卷第二部では、修験山伏の遊行と山岳信仰の原初形態を扱う。修験道はわが国の固有の信仰と仏教の密教及び陰陽道などの習合によつて組織されたが、山中に苦修練行する修行者と、民間人との接觸の結果、一般人の間にも頭陀巡礼の風を誘発した。そのために、修験の道場は有力な組織を持つに至り、先達御師の発生を見ることになつたのであるが、この事情を熊野三山の資料によつて精しく考証した。また、修験者たちの諸国遊行、村落歴訪の実情を、第四編「霞、檀那場と山伏御師の檀廻」に於て研究し、諸国の山伏伝説をはじめ、特に羽黒修験の霞割の制度や檀家廻り、これと關係のある伊勢神宮の御師の檀廻りについて詳述し、第五編に於ては、山岳信仰の原初形態を追究し、山中に死者の住所ありとする古い世界観をもつて、その源流の主な一つと推定し、第一卷第二部の論旨と照応せしめられている。

第三部ではわが国浄土教の展開と民間念仏の形態を扱う。先ず比叡山常行三昧堂を中心に発達して来た日本浄土教の歴史的経過を略述し他方、念仏行が本来は自己往生のためのものでありつつ、一面に死者鎮送の機能をも併せるに至り、段々分れて民間に普及して行つた結果、中世には特殊な道場形態と毛坊主を発生せしめ、さらには妻帯肉食の僧風の一面をもなした。近世に於て各地に見られた鉢屋、茶筌、ささら、鉦打、生団子などの特殊民も、以上のような念仏団体の残留であるとする。この特殊民が、死者に対する鎮送、慰藉の儀礼や呪術と密接に關係して来るのであるが、著者は平安時代に勃興した御霊信仰、すなわちあたりをあらわす死靈に対して、念仏が、修験者たちの調伏退散の呪術、陰陽師たちの物忌み、祓いの行事とならんで、これを防遏鎮送の呪術的宗教的機能を備えるに至つた経過を併せて考えている。

第四部の近世特殊民および漂泊民の呪術的宗教的機能は、上記の分類によると、俗聖の第三の類型であるが、陰陽師俗神道系の呪術的宗教的な職能者、すなわち一種の特殊部落民たる長吏、夙(宿)、唱門師、院内などの有様を、民俗誌及び地方誌の資料によつて蒐集整理し、更に第三の類型のもとに、節季候、かまはらい、春駒、鳥追、万歳などの特殊民の職能や行事、また季節的来訪行事等の、本来持つ呪術的機能を農耕社会との連関に於て考察し、また諸國遊行の勸進聖や、あるき巫女、口寄巫女、歌比丘尼などにも及んでいる。

以上が内容の概略であるが、通じていえば、第一巻では特に遊幸神に対する信仰の諸相を詳述し、第二巻では特に諸國遊行の呪術的宗教的職能者について、その道統、事蹟、形態、機能について、詳細な研究を行つている。著者は更に論を進めて、この遊行者の群と村落に土着する常民的な住民との関係や交渉の間に、わが國に於ける民間信仰形成の特徴があると見る。その特徴を次のようにいう。

すなわちわが國の民間伝承では、神と人との距離が極めて近く、人にして神に扮し、神を代弁し、往々神的性格を持つという觀念が強かつた。それが「人神」という觀念である。そこで第一巻において述べられたような遊幸神に対する信仰と、第二巻に述べられたような遊行者に対する民衆の態度とは、元来別個のものではなく、人神の信仰というところに於て一致結合される。しかもその發生は、死靈に対する信仰や崇拜と密接に関係する。蓋し、他界乃至他処(例えば山中等)に住むと信ぜられた死靈が遊行来往の性格を持つと共に、遊行者達すなわち山嶽信仰から發した山伏も田園遊行の念仏行者も、共に死靈に交りつつ自身も一種の靈的、或は神的性格を担い、且つ死者や死靈の管掌にあたるようになり、また俗神道陰陽師系の俗聖たちも口寄巫女を始め、大黒舞、夷廻しその他、自身死靈または神靈の

口を寄せ、或は神に扮し、神をまわせる人神的な呪術者であるとともに、その背後に農耕的呪術に見られる死霊の陰影を伴っている。かくしてそれらは中世以後に「語り物」化し、芸能化したのちも、亡霊文学、亡霊芸能の性格を濃くしている。しかしてここに我が国の民間信仰の中心をなす祖霊崇拜が胚胎し、且つ成長したと論じている。

一体、民俗学は、現在に伝承されている民間の生活文化を探訪調査し比較して、民族の基底に横たわる文化の様相を究め、且つその原初的形態に遡ることを主要な目的とするものであるが、著者は、このような研究方法を更に歴史的記録資料の間にも適用して、過去の時代を貫く庶民の文化や信仰を探究することが可能ではないかという観点をとっている。

惟うに、我が国の民間信仰は、日本の大多数の民衆の精神生活に直接し、且つ深い連関を持つものであるにもかかわらず、従来その研究は、民俗学の分野においても、部分的には見るべき業績があつたとはいへ、未だ学的な綜合、組織の域には至らず、また宗教史学の分野にあつても、殆んど未着手のままに顧みられなかつた。著者はこの間において、問題の重要性に着眼し、正確な民俗学的知識と、豊富な歴史的、民俗誌的資料とを綜合的に駆使して、上の観点を結実させ、前人未踏の業績を挙げた。これによつて著者は民間信仰研究の上に新しい途を開いたものである。